

8月5日
感想

安野フィールドワークに参加して

ニシノマドカ

原爆ドームも広島平和記念資料館も自分の目で見たことがなかった私は、8月5日に安野フィールドワークが毎年行われていると知り、広島の地を初めて踏むことになった。平和公園内で一日過ごし、翌日安芸太田町の中国人強制連行の現場を案内して頂いた。今回の参加者は9名で、私も個人的な動機があって参加した。祖母が遺した手記から、戦時中満州と呼ばれた中国東北部に祖父母が居留したことと、中国人強制連行の歴史事実との間に繋がりがあると考えた私は、そのことに自身が向き合うドキュメンタリー作品を制作中なのだが、取り組み始めて早6年が経とうとしている。花岡事件のあった秋田県大館市や、花岡和解に尽力した人々の様々な活動を撮影させて頂いた映像を目下編集集中だが、6月末の大館市での慰霊行事に今年も参加させて頂き、宿泊先が一緒だった内田雅敏弁護士から、花岡和解から西松和解、三菱マテリアル和解に至る流れを語って頂いたことが、今回のフィールドワーク参加のきっかけとなった。自分の不勉強さを自覚すると同時に、内田先生の語りの中にヒューマンドラマを感じ、現場の一つである安野を見てみたい、和解実現に尽力された川原洋子さんにお会いしたいと思ったのである。

安芸太田町に向かうバスの中でRCC中国放送が制作し2014年に放送した24分の作品「和解 ～広島・中国人強制連行問題の軌跡～」を見せて頂いた。叔父を強制連行されて亡くし、日本嫌いだった曲啓傑さんは、西松建設に賠償を求める運動の中で、日本の支援者への信頼を深めていく。和解事業の運営委員となった曲さんは、探し出した受難者・遺族に和解の意義を説明し、来日を希望する全ての人を広島に招く和解事業を牽引していく。6回に渡り199人の来日が実現したそうだが、2012年尖閣諸島国有化後の反日の空気の中、周りに「日本に行くな」と止められても、ここで諦め

たら全てが無駄になってしまうと曲さんは2013年の追悼式にも来日する。真の友好が育まれる過程を見せてくれる作品だった。同じくRCC中国放送制作、1993年放送の「トンネルに風が吹いた日 ～強制連行・被爆した中国人を追って～」も午後の学習会で見せて頂いた。被爆の後遺症で顎にできた癌を日本で治療したいと願う徐立伝さんとの出会いや、爆心地で亡くなった楊希恩さんのご家族が事実を初めて知って泣き崩れる瞬間など、1992年の5月に初めて青島を訪れた広島の市民グループが中国人の被害者・遺族と出会って対話をし、止まった時計を動かし始めるところから、48年ぶりに呂学文さんと孟昭恩さんが被爆者健康手帳取得のために広島を訪れて、爆心地から約2キロの広島刑務所で被爆した経緯を語り、安野の住民や西松建設とも対話を始める貴重な時間が集約された作品だった。

二つの作品のところどころで、中国の方々に語りかける川原洋子さんの柔らかい声が聞こえてくるのだが、私たちが案内してくれた日も、川原さんは拡声器を肩に下げ、一日中解説をしてくださった。事実を淡々と語る川原さんの語りに出会ったことは、私にとって大きな意味のある体験だった。「こんなことは許せない」という不正義に対する怒りは戦後補償運動にとって重要だったと思う一方で、怒りの表現が歴史の共有をかえって難しくする場合があるのではないかと感じ始めていた私は、川原さんの伝え方に学びたいと思った。花岡和解に尽力され、西松建設を訴えた訴訟で高裁勝訴を導いた新美隆弁護士の著書「国家の責任と人権」からも、怒りとは距離を置きながら、対話をするための法的な理論を練り上げる努力と信念に感銘を受けたのだが、お二人に共通するのは、過去を過去という時間に封じ込めない姿勢かもしれない。当時の日常の仕草を再現したりしながら、川原さんは中国の人々が国策で不法に連れてこられていた頃の安野の日常と、私

たちの日常との橋渡しをしてくれた。

特に私の心に残ったのは、トロッコの事故で失明された宋継堯さんについての話で、川原さんは裁判で使ったというトロッコの模型や写真、事故の現場などを見せてくれながら、丁寧に心を込めて語って下さった。宋さんの事故が身近な隣人に起きた事故のように伝わってきた時、悲惨な事実なのに何か心に触れるものを感じた。約 40 年間お一人で抱えてきた宋さんの苦悩を理解し、裁判で共に訴えた人々との出会いから生じた明るさのようなものは、99 年に 2 回目の来日をされた時、トロッコの操縦仕草をする宋さんの写真からも感じとれた。香草収容所の近くに銀杏の木があったはずだと、目の見えない宋さんが、その木を触っている写真も見せて頂いた。「あれがその木です」と川原さんが指さしたのは一つの切り株だったのだが、宋さんの物語を知った後、貴重な記念碑のように思えた。

それは前日に広島平和記念資料館で聴いた被爆体験伝承講話や、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に登録されている、被爆した中国人の方々 19 人の内の 10 人の情報を拝読したこととも繋がる体験だった。川原さんに教えて頂いて訪れた後者の祈念館では、パソコン上でお名前を検索すれば、登録された被爆者のことを知ることができる。西松建設との交渉を 1993 年に来日して開始された呂学文さんについての説明は娘さんが書かれていて、強制連行の体験を 40 年間口外しなかった父親が 1993 年から 10 年間、正義を広めるために奔走したと記されていた。また被爆二世としての健康不安にも触れられていた。私たちが主体的に関心を持ったとき、会ったこともない人たちの物語が立ち上がってくるのを広島で感じた。人が生きた証を残し、伝えるということは、人間の営みなのだなと感じる。

発電所を作る工事の全体像を理解するのに時間がかかった私は、中国と朝鮮の人々が山中をダイナマイトで爆破しながら掘り進んで安野発電所までの 7.7 キロのトンネルを作り、上流からの水をそのトンネルで運

んで、安芸太田町と広島市に電力を供給する水力発電所を作ったという事実を、最後に上流の土居取水口を見せてもらったときに、ようやく実感できた。物理的に大変な工事だったことが、青い山々の中を貫通するトンネルが全く見えないことからわかる。服も靴も中国を発つ時支給されたきりで、着替えもなく擦り切れて、真冬も裸足で作業をし、一回の食事がマントウ一つだったという非人道的な状況と、緻密に計算された立派な発電所の設計や工事が共存していたことが怖い。人間は理性的に狂ったことをしてしまう。原爆の開発と投下もそうだ。それを初めて知った時の「怖い」という感情は重要なものだと思う。恐怖ゆえに歴史から目を背けたいという気持ちが生じる一方で、人と出会って対話しながら、なぜその事実が生じたのか、人々はその事実をどう生きたのか、どう乗り越えようとしてきたのかなどを考える動機にもなるからだ。外国からも大勢の人が広島を訪れて、自分が何を感じるのかという問いに向かい合っている。広島にあるこの真摯な開かれた空気を、歴史を学びながら生きる姿勢として持ち帰りたいと思った。また、長崎の刑務所でも強制連行された中国人 32 人の方々が被爆死していることや、強制連行された朝鮮人の方々の被爆の事実も含めて、原爆と強制連行、両方の歴史事実について考えることは、私たちの課題だと感じた。民主主義を担う力を養うために向かい合いたい。

私は撮影の許可を頂き、参加された皆さんの顔が映らないようにカメラの画面とにらめっこして一日過ごしてしまった為、皆さんの顔を見て対話する機会を持てなかった失礼をお詫び申し上げたい。また、明るく温かいお人柄の善福寺の藤井ご住職や、きめ細かくサポートをしてくださった中さんから心に残るお話を頂いた。広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会の皆さん、川原さん、中さんをはじめ、土屋さん、岡原さん、バスの運転手さん、坪野貯水槽を案内してくださった中国電力の職員さん、お世話になった皆さまに心からお礼申し上げます。どうもありがとうございました。